King Lear に於る identity のゆらぎ

―― Lear の場合 ――

友　清　蓉　子

Lear が 'nature'（親子の情愛）の多少を物質で量ることができると，本気で思ったかどうか。

> Which of you shall we say doth love us most?
> That we our largest bounty may extend
> Where nature doth with merit challenge.
>
> (I. i. 52–54)（以降下線筆者）

例えそういう問いが「儀式」の上での演技であったとしても，それを承知で（？）これに正確に符合する答え方をした Goneril と Regan が，欲しい物を手に入れた後，どう振る舞うか。実権を譲った Lear と，そういう2人の娘の間に，「親子の情愛」(nature) という 'bond' (I. i. 95) だけはまだあるはずだったのだが。

Goneril の邸で，'a most faint neglect' (I. iv. 73) を感じ始めた Lear が受けた最初の衝激は，Oswald を通して来た。

Oswald の無礼に，Lear は自分が王であることを知らしめようと，問う。

> Who am I, sir? (I. iv. 85)

ところが Oswald の答は，

> My lady's father. (I. iv. 86)

と，Lear の期待を見事に裏切った。

Doth any here know me? This is not Lear:

… … …

Who is it that can tell me who I am? (I. iv. 246, 250)

続いて Goneril に100人の家来の狼藉の責任を問われて，今まで Lear が自分だと思っていたもの，絶対の権力の座にある王であること，3人の娘に傅(かしづ)かれる父親であることの両方を否定され，改めて何かが確実に変化したことを実感する。どちらの基礎も，とりはずしたのは他ならぬ Lear であった。王権と領土を譲り，娘とよぶにふさわしい Cordelia を勘当した Lear が，今までの Lear でなくなったのは明らかであっても，自分でそれに気づき始めたばかりであれば，Fool から，'thou art nothing' (I. iv. 213) と指摘され，同じ Fool の言葉 'Lear's shadow' (I. iv. 251) 通りであるのは当然であろう。

Hear, nature, hear; dear goddess, hear! (I. iv. 296–311)

Lear の怒りは祈りとなって 'nature' に向けられる。従者の数を半数に減らす処置をした Goneril を懲らしめてくれ，という祈りである。

'nature' は，「子供を宿らせる力を持つ女神」であって，祈りは2つの選択肢を持っている。

1. 'a babe to honour her' を与えずに，Goneril を 'sterility' とする。
2. 'a thwart disnatured torment to her' を Goneril に与える。

親を愛する子供を持つ親の喜びも，子供を愛する親でありながら子供に背かれた親の苦しみも，共に味わった Lear が，最も深い喜びを禁じ，最も深い苦しみを Goneril に与えて欲しいと願うのは，それ以外に自分の今の苦しみを娘にわからせる手段が無いと思っているからであろう。

I will forget my nature. (I. v. 35)

「娘を愛する気持」'nature' があればこそ，娘に裏切られた苦しみは大きい。愛憎は表裏一体となって Lear を苦しめている。「娘を愛し，娘から愛される気持」'nature' を忘れてしまいさえすれば，この苦しみから逃れられるかも知れない。

それにしても，あの時まであれほどかわいいと思っていた Cordelia が期待通りの答え方をしなかったという，それだけの理由で，親子の縁を切ってしまった。最も愛した娘だったから，自分の「戯れ」につきあうのを拒んだことに，いっそう腹が立ったのだ。

O most small fault,
How ugly didst thou in Cordelia show! (I. iv. 288–289)

愛する Cordelia を不当に処してしまったという後悔の念 'I did her wrong—' (I. v. 25) と，忘恩の Goneril に対する憤りと，2つの思いが同時に Lear を苦しめて，Lear は精神のバランスを失いそうになる。

O, let me not be mad, not mad, sweet heaven! (I. v. 49)

Lear に対する精神的打撃は，更らに次の幕で執拗に，確実に繰り返される。

Goneril の邸を出て Regan のもとへ向った Lear は，先づ Regan の留守を知る。先に送った使者 (Kent) に対する返事もよこさないのはどういう理由からか。訝(いぶか)る Lear の眼に入ったのは，足枷を掛けられた Kent の姿であった。王の使者に加えられた 'murder' より悪い屈辱 (II. iv. 23)。

事の真相を質(ただ)すため，Regan 夫妻に会おうとするが面会を断わられる。夜を徹(つい)ての旅に疲労しているから，と。

The king would speak with Cornwall ; the dear father
Would with his daughter speak, ... (II. iv. 102–103)

どんなに腹を立てても，２人にとって王であり，父親でもあると思っているのは，Lear の側だけであって，Cornwall も Regan も Goneril と心を一つにしていて Lear を歓待する気は無い。一旦は疲労のせい，と思いなおそうとするが，眼の前の足枷の Kent を見れば，２人の正体は見えてくる。

やっと姿を現わした Regan の挨拶の言葉じりを捉えて，'I think you are (glad) ; I know what reason I have to think so :' (II. iv. 131) と，皮肉を込めて言う Lear は，それでも，一つには，それだけのものを娘に与えたということ，もう一つは，何よりも自分の血を分けた子供であるという理由から，Regan が自分に会って嬉しくないはずはない，と考えている。

「親子の情愛」(nature) を信じる気持は，'if thou shouldst not be glad, I would divorce me from thy mother's tomb, Sepulchring an adultress.' (II. iv. 132–134) という台詞にも現われている。もし，Regan が父親に会って嬉しくなければ，それは自分の妻が 'adultress' で，Lear と Regan は実の父娘ではないという理屈である。Lear に会って嬉しいという Regan の「父親に対する愛情」(nature) を信じる気持があるから，Goneril とのことを打ち開けて話せば，Regan には解ってもらえると思っている。すでに，同じ条件の姉娘に裏切られていながら，Lear の 'the offices of nature' (II. iv. 189) を信じる気持は，少しも揺らいでいない。

そんな Lear にも，ただちょっとひっかかる事がある。

Who put my man i' the stocks ? (II. iv. 184)

返事はタイミングを計ったようにひき延ばされ，３度目の問いにやっと

Cornwall が，'I set him there, sir' (202) と答える。Lear の最初と，2番目の問いの返答を遮ったのは，他ならぬ Goneril の来訪を知らせる 'tucket' (184) の響きと，Goneril 本人の姿であった。

Goneril の訪問，Goneril の手を親しくとる Regan, Cornwall が Kent に足枷を掛けたという返事，に Lear は驚きと，怒りを抑えきれない。

父親と2人の娘のやりとりは，一気に核心に迫り，親子関係は破局へむかう。

Lear に従う家来の数を Goneril が半分の50人に減らした。これを更らに Regan が25人に減らすよう申し出る。

I gave you all— (I. iv. 253)

Lear の口から嘆きの言葉が漏れる。

Thy fifty yet doth double five-and-twenty,
And thou art twice her love. (I. iv. 262–263)

それでも，娘の愛情 (nature) を，従者の数で量れると思っている Lear は，娘の愛情の量に従って，領土を分け与えようと考えた Lear と少しも変わっていない。

それなら，25人を10人に，それを又5人に減らし，そして1人も要らない，というのは，則ち，愛情は無いということであり，正しく Goneril と Regan には Lear に対する愛情は無かった，ということであった。

「Lear の言語」で，2人の娘は自分たちに父親に対する愛情 (nature) が無いことを語った訳で，これは，Lear にもよく解った。

O, reason not the need: our basest beggars
Are in the poorest thing superfluous:
Allow not nature more than nature needs,
Man's life's as cheap as beast's: (II. iv. 267–270)

'nature' とは，'superfluous' なものを取り去って後に残ったもの，これ以上剝ぎ取るもののない剝き出しのもの。'man's life' の大本となるものである。Lear にとっての100人の従者は，Lear の 'nature' に附加された 'superfluous' なものであって，それが 'man's life' を 'cheap' でない何かしら豊かなものにしてくれる。

'superfluous' なものを剝ぎ取られた今，Lear は自分を 'a poor old man, As full of grief as age' (II. iv. 275–276) と，初めて認識する。

I shall go mad! (II. iv. 289)

外では嵐の前触れの風が吹き始めている。2人の娘と訣別した Lear は，夜の嵐の中へ出て行く他はない。

Lear が苦しみを訴えるのに，嵐ほどふさわしい相手はなかったろう。嵐は，Lear にとって怒りの表現手段となり，Lear は嵐と一体化さえする。Lear の怒りのエネルギーは，風に乗り，雷鳴となって天を駆け下り，たたきつける雨となり，逆巻く波となって放出される。

風よ，雨よ，雷よ，と Lear は嵐によびかける。持てる力を存分に使って，この世を水びたしにし，地球を打ちひしぎ，別けても恩知らずの人間 'ingrateful man' を造り出す 'nature's mould' を砕き，'all germens' を壊してしまえ (III. ii. 8–9)。嵐は Lear の復讐の手先ともなっている。

しかし，と Lear は考える。嵐には Lear に従う義務はない。嵐にとって Lear は，国王でも父親でも，まして，領土を与えた間柄でもないのだから (III. ii. 17–18)。

それまで味方のように感じられていた嵐が，ふいに Lear とは無関係な存在となって遠のく。Lear が自分のことを，

A poor, infirm, weak, and despised old man. (III. ii. 20)

と感じるのは，この時である。

ひょっとしたら，この嵐は味方どころかあの2人の回し者かもしれない。だからこんなに自分を苦しめるのだ。悪いのはあの2人の娘なのに。

I am a man
More sinn'd against than sinning. (III. ii. 58–59)

Lear は，身を曝し，心を放って嵐と「対話」したのであった。

心の中の嵐 'the tempest in my mind' (III. iv. 13) は，外界の嵐のもたらす肉体的苦痛を上まわっていて，Lear の五感を麻痺させる 'the greater malady is fix'd, The lesser is scarce felt' (III. iv. 8–9)。一方，風に吹かれ雨に打たれて肉体が痛めつけられることによって，内面の嵐には一時の休止がもたらされる 'This tempest will not give me leave, to ponder On things would hurt me more.' (III. iv. 24–25)。このように，外界の嵐と内面の嵐の間には，一種の相互作用もおきていた。

嵐は人間の心も身体 'nature' も痛ましめるもの (III. ii. 48–49)。その力に曝されることによって，Lear はようやく変容の兆をみせ始める。

怒りが極まると，Lear はその先に狂気をみてきた。それは，5度にも及んでおり，(I. v. 49)，(II. iv. 221)，(II. iv. 289)，(III. ii. 67)，(III. iv. 21)，換言すれば，ここまできて正気の中での怒りは出し尽されたということであろう。

狂気の一歩手前で，Lear は美しい心の動きをみせる。

Poor naked wretches, wheresoe'er you are,
That bide the pelting of this pitiless storm,
How shall your houseless heads and unfed sides,
Your loop'd and window'd raggedness, defend you
From seasons such as these? O, I have ta'en
Too little care of this! ... (III. iv. 28–33)

これまで自分の事にのみ感けてきた Lear が，少し前にみせた Fool への思いやり（III. ii. 72–73）を更らに拡げて，複数の見も知らぬ人達の痛みを自分の痛みと感じ，それを労り，王でありながら，あるいは王であったが故に，その事にあまりにも無関心であったことを悔いる気持を語っている。狂気というもう一つの嵐の前の静かな心を映す台詞である。

狂気は，Lear の意識に繰り返しのぼりながら，その度に，狂気に対する怖れと，それを回避したいという願いが Lear の精神を正常に保たせてきた。この微妙なバランスは，Tom との思いがけない出遇いで破られる。

Edgar の扮する気違い Tom は，狂気を演じることによって，Lear を狂気の世界へと誘った。狂気を押し止めていた理性の枠がはずれ，Lear は Tom と「同化」することによって新しい世界を観ることになったのである。

Lear は Tom に自分の境涯を重ね，それを映して見ている。辛うじて 'blanket' 一枚を身に纏う Tom の姿は，娘に裏切られた父親の成れの果てとしか思われない。しかし，よく考えてみれば，それもこれも，元はといえば，そういう 'pelican daughters'（III. iv. 77）を造り出した父親の肉体（nature）に原因があるのだから，'Judicious punishment'（76）と言うべきかも知れない。「罪を犯しているのは彼らの方だ」（III. ii. 58–59）と，被害者意識の強かった Lear の，罪の処在を考える次元も深まり，そこでの自らの責任も感じているらしい台詞が，呟やかれている。

更らに進んで，Tom の 'uncovered body'（III. iv. 106）を眼にした Lear の頭に，新しい人間観が天啓のように閃く。

> Is man no more than this?
> Thou owest the worm no silk, the beast no hide, the sheep no wool, the cat no perfume. Ha! here's three on's are sophisticated! Thou art the thing itself: unacommodated man

is no more but such a poor, bare, forked animal as thou art.
(III. iv. 107–113)

100人の従者を，'superfluous'（II. iv. 268）ではあっても，自分にとっては無くてはならないもの，と固執した Lear が，今は人間を 'a poor, bare, forked animal' と認め，それが人間の本来の姿（nature）であると感じている。

今までの自分たちの姿は，'sophisticated'（110）にすぎなかった。様ざまな動物からの借り物で身を飾り，しかも，その事実に気づかなかった。Lear は着ている服を脱ごうとする。服は 'lendings'（113），借り物に用は無い。

Tom に人間の原型を見，人間の本来の姿を見た Lear は，Tom と「同化」したいと願っている。服を脱ごうとするのも，Tom と一緒に居たいという台詞が繰り返される（6度）のも，そのあらわれである。

His wits begin to unsettle. (III. iv. 167)

常にそばに居て，Lear のすべてを見て来た Kent が，初めて Lear の狂気に言及する。Lear の狂気は，これまでは本人だけが見つめ，怖れてきたものであったが，今，本人の意識を離れて，他人の認識に委ねられた。

狂気の最中（さなか）にあっても，Lear の，自分が王であること，そして娘に裏切られた父親であることの認識は失なわれなかったようである。

Fool. Prithee, nuncle, tell me whether a madman be a gentleman or a yeoman?
Lear. A king, a king! (III. vi. 10–12)

Fool の問いと，Lear の答えがずれているのは，Lear の狂気のせいであっても，その狂気の中に生き続けている，自分が王であるという identity

の core の確かさは，完全な狂気以上に哀れを感じさせる。

Lear にはどうしても解けない謎がある。Goneril も，Regan も，正真正銘の Lear の娘である。Lear の側には娘を愛する気持（nature）は充分にあり，父親としての義務も果たしてきた。それなのに，なぜ，その娘たちが1人ならず2人までも，子供としての父親に対する愛情(nature)に逆うようなことをして父親である Lear を苦しめるのか。2人をこの世に送り出したのは，まぎれもない自分の肉体（nature）ではあるが，ああいう娘たちを造り出した‘nature’に何か理由があったのだろうか。

Is there any cause
in nature that makes these hard hearts? (III. vi. 81–82)

Goneril に生まれてくる子供は，‘a thwart disnatured torment to her’（I. iv. 305）であれ，と‘nature’（I. iv. 207）に祈った時，Lear の側にはそう祈るだけの理由があり，そういう祈りは‘nature’に届くはずであるという気持があったであろう。

Lear は，今になって思いあたっている。Goneril と Regan という2人の娘が，自分にとって‘a thwart disnatured torment’であるのは，あの時自分が祈ったような‘cause’が何か‘nature’にあったのかもしれない，と。罪の意識の次元は，ここでもう一段深まったと言えよう。

2人の娘についての解けない謎は，‘adultery’（IV. vi. 112）という言葉となって Lear につきまとっている。正式な結婚によって生まれた娘が父親に背くならば，‘Gloucester's bastard son Was kinder to his father than my daughters Got 'tween the lawful sheets.’（IV. vi. 116–118）という「噂」も信じられる。それにしても，‘adultery’なら，まだ許せる。

Thou shalt not die: die for adultery! No: (IV. vi. 113)

'Centaurs' (126) に擬えられた Goneril と Regan は，神の似姿で Lear に詣い，悪魔の正体を露して Lear を欺いた (IV. vi. 120–133)。お蔭で，Lear にもよく解った。自分が生身の肉体を持った人間(nature)であることが。

I am not ague—proof. (IV. vi. 107)

Lear は，家柄からいって生まれながらの王であり，子供を設けたという事から生じる父親という存在の形と共に，これを誰れも否定することはできない。

Nature's above art in that respect. (IV. vi. 86)

否定されたのは，Lear の，王と父親という地位に伴う 'authority' (I. i. 308, I. iii. 17) であった。

狂った Lear の心の中で，'authority' は，固定的であることを止め，そのあるべき場所を容易に変え得る流動性を得ている。

'thief' (IV. vi. 166) と，'justice' (155)，あるいは，'beggar' (159) と，'dog' (158) に関して，'authority' が居場所を変えれば，それぞれの立場は逆転してしまう。'authority' とは，もう一つの 'superfluous' なものであったようである。

'whore' (IV. vi. 164) に鞭をあてる 'beadle' (163) は，その 'authority' の内側に，同じ罪の衝動を隠し持ち，'cozener' (167) を死罪にする 'usurer' (168) も所詮は同じ穴の狢にすぎず，'Robes' と 'furr'd gowns' (168) のお蔭で罰を免れている者も，'tatter'd clothes' (168) の故に罰を受けている者も，Lear には皆区別のない同じ人間達に思われてくる。

None does offend, none, I say, none ; I'll able'em
(IV. vi. 172)

Tom に遇って，人間の原型を 'a poor, bare, forked animal' (III. iv. 112–113) と感知した Lear は，ここで，そういう人間に哀れと，いとおしさを感じ始めている。

When we are born, we cry that we are come
To this great stage of fools: (IV. vi. 186–187)

Cordelia との再会の機は熟した，と感じさせる台詞である。

深い眠りから醒めて，狂気の鎮まった Lear に，狂気の最中の記憶があったかどうか。少くとも Cordelia に許しを求める Lear に，後戻りは無い。

自分の「論理」に従わせようとして「背いた」娘を勘当した Lear は，その論理の間違いには気付いたが，それでもなお，Cordelia に確かめずにはおれない。

I know you do not love me; for your sisters
Have, as I do remember, done me wrong:
You have some cause, they have not. (IV. vii. 73–75)

「理由も無しに」2人の娘に苦しめられた Lear には，Cordelia の真実を見誤って，彼女のすべての権利を奪ってしまった，という理由 'cause' の故に，どんな仕返しをされても当然であるという思いがある 'If you have poison for me, I'll drink it' (IV. vii. 72)。

財産分与の場面で，Cordelia がひとり，父親と姉2人のやりとりの次元から離れていたことを思い出せば，ここでの彼女の 'No cause, no cause' (75) という答えにどんな思いが込められているか了解されよう。

言葉で表現された愛情の多少に従って領土が分配されるという「儀式」を拒否した Cordelia は，その結果として領土を与えられず勘当されたことに，何の意味も認めていない。Cordelia にとって重要だったのは，生

を受け，慈しみ育てられたと思う娘が父親に抱く当然の愛情（nature）を全うすることであった。

自分の‘frame of nature’(I. iv. 288) を，その土台から‘wrench’した‘engine’(290) であると思っていた Cordelia が，実は，Lear が遥かな旅の後，帰って行くべき旧くて，新しい枠組，‘the fix'd place’(I. iv. 288) そのものであったことを，今やっと Lear は了解した。

You must bear with me:
Pray you now, forget and forgive: I am old and foolish.
(IV. vii. 82–84)

Cordelia の愛情につつまれた Lear には，‘authority’を意識した王や父親の影は無い。

再会と和解の喜びは，しかし，長くは続かなかった。次に我々が2人を眼にするのは，イギリス軍の捕虜となって牢へひきたてられていく姿である。

Cor. We are not the first
Who, with best meaning, have incurr'd the worst.
(V. iii. 3–5)

Lear の復権を願って‘with best meaning’フランス軍を率いた Cordelia であったが，逆に，Lear ともども敵方の捕虜となってしまった‘have incurr'd the worst’のである。Cordelia のこの台詞は，この場を越えて，作品全体に通じる意味合いを持っているように思われる。

財産分与の場で，Cordelia が，どんなに真摯な思いで事の成り行きをみつめ，例え，その場の父親の意に沿わなくても，娘として父親を生涯愛し続けようと固く自分に誓ったか。

Lear に問われて止むを得ず答えた Cordelia の台詞，

I love your majesty
According to my bond; nor more nor less.
… … …
You have begot me, bred me, loved me: I
Return those duties back as are right fit,
Obey you, love you, and most honour you.
(I. i. 94–95, 97–100)

は，まるで，'nature'（子が親に対して抱く当然の情愛）という言葉の内容として，必要にして充分な，エッセンスだけでできているようでさえあった。眼前に，これほど豊かな，確かな'nature'が存在しているのに，Lear にはそれが解らなかった。Lear は，Cordelia という'nature'そのもののような人物を却けることによって，Goneril と Regan という'unnatural hags'（II. iv. 281）の跳梁する'unnatural'な世界の存在を許してしまったのである。

自分が去った後の Lear の運命を知って，胸を痛め涙する Cordelia の様子（IV. iii.）も，再会した Lear のそばで，恢復を見守る Cordelia の姿も，'Love, and be silent'（I. i. 63）と自ら言いきかせた Cordelia と矛盾しない。

Cordelia は，終始一貫して，豊かで，聡明で，勁く，美しく，愛情に満ち溢れていて，非のうちどころがなかった。

それ故に，あるいは，それだからこそ，Cordelia は，Lear の世界を根底から揺り動かす強力なモメントとなり得たのである。Cordelia の存在には，そういうアイロニイがつきまとっていて，このことが，この作品の悲劇性をいっそう高めている。

物語の最初，Lear を諫めようとした Kent を遮った時，Lear は'dragon'（I. i. 124）であった。

Lear の遍歴の過程で，Lear を始めとする登場人物の台詞に現われる

動物の image は，種類にして約50，頻度は100回近くに及んでいる。それらの動物達は，人間の醜悪な部分を映しとる鏡の役割を果たしてそのほとんどが，マイナスのイメージで使われており，*King Lear* の世界の異様さを物語っている。100回の内の約$\frac{1}{3}$が Lear の台詞に現われていて，それは Lear の外の世界と内の世界の在り様を示す指標ともなっている。

狂気の Lear は，人間が本質的に動物と異ならないことに気づいた。

物語の終りに近づいた今，Lear は，自分を‘dragon’ではなく，‘birds’(V. iii. 9) や，‘foxes’(V. iii. 23) と，又宮廷にあって権謀術策に明け暮れる者達を‘gilded butterflies’(V. iii. 13) とみている。いずれも無力な生き物の境遇の哀れさが，Lear や周囲の者達のそれと重ね合わされている。

そして終幕。Edmund の命令で絞殺された Cordelia の遺体を抱いて Lear は再び正気を失い，悲しみのあまり絶命する。

> Lear . . . my poor fool is hang'd! No, no, no life!
> Why should a dog, a horse, a rat, have life,
> And thou no breath at all? (V. iii. 305–307)

卑しい‘dog’も‘horse’も‘rat’も，生命があるのに，なぜ貴い Cordelia にはないのか，という意味ではなかろう。既に，人間を‘a poor, bare, forked animal’と認め，更らに自らを‘birds’や‘foxes’に擬え得た Lear は，「生命」という究極の次元で，最も愛する Cordelia の，ひいては自らを含む人間の存在の拠って立つ所に思い到ったと言うべきであろう。この台詞は，そのことを前提にした，悲しみの流露である。

‘nature’は，親子の情愛である。又，それを育む人間の肉体であり精神である。‘superfluous’なものを剝ぎとって後に残る，これ以上取り去る物のない剝き出しのもの，人間の生命そのものである。

そういう‘nature’を軸に，Lear の identity は，大きく振幅を描い

て変化した。生命の次元で人間を捉え得た時，Lear の「旅」は真の意味で終ったのだと言うことができよう。